**ペギーとベルクソン (レジメ)**

　　　　　　　　　　　　　　　　　２０１４年６月３日（火）　第２３回心身変容技法研究会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　**檜垣 樹理**

1. **ペギーとベルクソンの出会い**

引用１−２

＜まだ表現されていないベルクソンの思想の本質＞を知ったペギー　？

\* 「ペギーがどのようにベルクソンを理解し自分のものとして、その思想を超えつつ独自の創造に変容させていったか」

\* メルロー　ポンティ「もう出来上がってしまったベルクソン(Bergson tout fait)」と「生成しつつあるベルクソン（Bergson se faisant）」

 \* ペギーは、ベルクソン思想を、初期の、まさにその思想が湧出する生きた源流の中に知る事ができた人のひとりであり、その出会いと別れによって、ベルクソン自身を深くゆさぶり痕跡を残したのでは？

\* ペギーは、高校時代からベルクソンの最初の著作に親しみ、１８９７年高等師範学校と Collège de Franceでのベルクソンの最初の講義に出席し、１９１４年（ベルクソンの最終講義そしてペギーの戦死の年）まで、その生きた声に耳を傾けながら、その著作を、自由な批判も交えながらも心底評価していた。「内的生命の源泉の再発見」

\* １９１４年ペギーが戦場に赴く前日まで書き続けていた絶筆の『デカルトとデカルト哲学についての覚え書き』当時のインテリから攻撃されていたベルクソン哲学を防護し、その生命の発展の可能性を明らかにするもの

ベルクソンは最晩年に、カトリックの信仰に近づくことによって、さらにペギーを内側から理解するようになったのでは？

ペギーがベルクソンから何を学び、どこでベルクソンの思想の展開をいわば先取り、表現してベルクソンに影響を与え得たのか？

「ベルクソンの最後の思想にペギーの思想がどうかかわりうるか」今後の課題。

今回は、その前段階として、1914年以前のぺギーの生前に書かれた著作を土台に二人の思想のかかわり合いを見たい。

**I.ペギーとベルクソンの出会い**

 **II.ペギーの＜実在＞の探求とベルクソン**

**III.神秘体験と＜内的生命の源泉＞としての＜恩寵＞　晩年作品におけるベルクソン**

**II. ペギーの＜実在＞の探求とベルクソン、年表参照**

1. **実証主義科学からの解放、形而上学の帰還**

　\*コレージュ・ドゥ・フランスのベルクソンの金曜日夕方の講義　　引用７−１１

　　　　\*パスカルとベルクソンの二重の影響、科学実証主義から解放、信仰への道程

\_パスカルによる、身体、知性、愛という現実の異なった秩序の区別、また

\_ベルクソンの、空間／持続、物質／記憶、機械的／有機的、の区別によって、

科学的方法の限界と位置を明らかにし、

行動や芸術、宗教的次元を含む＜心＞の＜直感＞の役割を明らかにする事で、

＜身体＞と＜知性＞＜心＞が異なった次元、秩序(ordre)に属しながらも、

互いに開かれ、高位の次元に秩序づけられ、行為のうちに一致する哲学を可能にした。

\* 初期のベルクソン哲学がペギーに提供した３つのポイント

 「内的で有機的な持続」、「現在の自由」、実在をつかむ「直感」

 : 近代科学の世界観に欠けていた３つの視点。

 これをパスカルの「３つの秩序」に応用することで、ペギーは固定化され枯渇した心身二元論を超えて、本源的な性格をもつ＜実在＞における心身の一致を見いだした。

\* ペギーの＜実在＞の探求

 論理的推定に対する出来事の現実、実在の優位　（引用１２）

 複数の科学的真理(les vérités)VS単数の実在(le réel)

 知性が恣意的に切り刻んだ区別VSその深みの湧出と全体性において、単純な直感でとらえられた実在、-科学的真実の論理的推定 : 象徴のように二次的なもの、恣意的なメタファー

 「人工的な一致」、「専制支配」の危険　→　ペギーの近代批判へ

**２）パスカル「３つの秩序」「心の秩序」解釈におけるベルクソン**

　　　　人間のヴィジョンとしてのパスカル＜三つの秩序 : 身体(corps)、知性(esprit)、愛(charité)

 「一致に還元されない多は混乱であり、多に依らない一致は専制支配(la tyrannie)である」（S.501）

　　　　「専制とは自らの秩序の外に普遍的に支配すること」（S. 92, B.332）

　　　　　異なった秩序の共存する多元性の中で、どこに根本的な対立を見るか、どの次元に一致をみるか

**パスカルの３つの秩序(S.339)について**

　\*　パスカルの人間観 : ギリシャ的ヴィジョンと、ヘブライ的、聖書的ヴィジョンのコンビネーション

　　　　−　ギリシャ的人間観　　人間を、肉体、知性、魂などの異なった部分で構成されていると見る

　　　　　　　　　　または、実在は見えないイデアにあるとするプラトン的象徴のヴィジョン

* ヘブライ的、聖書的人間観　丸ごとの人間を、身体、知性、霊の異なった視点から見る。

　　　　または、事実（アダム）が事実（キリスト）を指し示す表徴（figure）

　　　　　　*聖パウロによる＜肉＞vs＜霊＞、＜文字＞vs＜霊＞の対立*は、

　　　　　　　＜人間まるごとが、神の霊（プネウマ）に開かれ、生かされる生き方（霊）＞vs

　　　＜人間が自己保存的、自己中心的生き方によって神の霊に閉ざされた生き方（肉）（文字）の対立＞

**\* パスカルの３つの秩序の特徴**

−「視点としての方法論」(Emile Boutroux)「常に人間まるごとに向かっていく」

−　人間まるごとの生き方を、価値選択、目的により３つの異なった視点で見ると同時に、

表徴(signa)と実在(res)という二元性を使ったアナロジーによって、

人間の究極の目的である超自然の愛の秩序に目をむけさせる。

＜spirituel＞という語の二義性（esprit-intelligenceとesprit-pneuma）をバネに、知性と愛を隔てる＜無限に無限の距離＞の飛躍を示す。

「すべて愛にまで至らないものは表徴である」（パンセ）

　　愛 :la charité : 聖霊l’Esprit Saint : 恩寵la grâce

 　聖パウロ 「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛(Caritas Dei)が私たちの心に注がれた」

　＝　アウグスチヌス的　プラトン主義でありながら、キリスト的聖霊に開かれたヴィジョン

 **\* ペギーの解釈の特徴**

表徴（signa）が指し示す resはイデアではなく、可視世界を根底で支えて養っている実在であり、交わり（communion）であり、その源泉から「思想とイマージュが同じ豊かさで湧出する」。

＜二つの軸の交わる中心点＞は、キリストの受肉の神秘にあり、詩人はそこに身をおいて創作活動をする。＜受肉の詩学＞（科学はメタファーであるが、ペギーの詩作はメタファーではない）。

**\* ペギーの「３つの秩序」のヴィジョン　（図を参照）**

１９００年、１９０５年、１９０７年の３回にわたって全文引用ののち考察

　　＜３つの秩序＞の引用と考察１　１９００年

- パスカルの第三の＜超自然の愛＞の秩序を社会主義者の＜連帯＞の行動の秩序と置き換え、

「より深く」「より内的で」「より全体的で」「より本源的」な秩序と特徴づけている　 引用１４

−　コンテクスト「流感について（De la grippe）」＜病の善用＞「死せるものの視点から世界を見る」

　　民衆大学　＜科学＞と＜連帯の実践＞との間に横たわる溝

\* 一致と交わりは、知的レベルにあらず、身体と知性をより＜深く＞＜内側で＞＜より統合的な＞レベルで内包する、第三の秩序にある。愛／連帯の実践の行動によって生きられたレベルに降りる必要。

そこでは、無学の一市民と天才が同じ源泉から来る直感的な動きで結ばれている。

＜３つの秩序＞の引用と考察２　１９０５年　有機的な垂直のつながり、記憶の発見、

　　水平方向に線を引く「地理的」知識と、垂直方向に深みのつながりを見る「地学的」知識、

　　下位の層を内包する３重の輪　引用１５

＜３つの秩序＞の引用と考察３　１９０７年　＜心の秩序＞VS＜知性の秩序＞、

 現実を掴む直感と、メタファーとしての科学科学的進歩の一元論批判　＜霊的＞な次元を覆い隠す

　　野望をもった知的＜専制支配＞ 、＜傲慢＞の危険　引用１６　新たな偶像としての近代思考

**\* ペギーによる＜パスカルの３つの秩序＞の図　参照**

　**第三の愛の秩序**のレベルは、知性と身体を内包し、深い海底のように無限にひらかれ、水上で孤島のようにばらばらに見えていたものがすべて根底でつながっている。実在、深い記憶の海？、見えるものと見えないもの、自然と超自然が交わり一致しているこの深みが、恩寵が働く癒しの場。詩人はそこに決然と位置して創作し、思想とイマージュが同時に湧出する源泉となる。

直感によって捉えられる純粋持続の場、今、ここの、自由ないのちの生成の場、

この存在の一致と深みでの交わりをみる事を可能とする垂直のまなざしが＜心の秩序＞

それに対して、いのちの垂直の根付きを断ち切り、水平方向にすべてを還元してしまう科学的まなざしの専制支配を批判

＜神秘＞の動きと＜政治＞の動き　→　ペギーにとっての根本対立

３）＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞の神秘的一致と＜神秘＞と＜政治＞の根本的対立

　生きた哲学の機能 :時代に適した区別（根本的対立）を導入することによって、固定化し命のダイナミズムを失った古い二元論を超えて、存在の一致を見いだす動き。

ペギーの時代では、唯物論と唯心論という「粗野な二元論」が前もって陥っていた混乱に、「空間」と「持続」の間にある「質的な違い」「度合いの違いではなく性質の違い」、いわばパスカルの「無限の距離」をベルクソンが指摘することによってこの、＜身体＞と＜心＞の深みの一致を見いだす道程が始まった。

引用 17-19

**各思想家にとっての根本的対立、**

**デカルト**にとっては、＜秩序＞vs＜無秩序＞、**ベルクソン**＜出来上がったもの＞vs＜生成しつつあるもの＞

 **パスカル**　＜邪欲(la concupiscence＞vs＜恩寵(la grâce)慈愛（la charité）＞、

**聖パウロ**　＜肉的(charnel)（自己中心的生き方）＞vs＜霊的(spirituel)(Pneuma 聖霊によって新しく生かされる生き方) ＞　（＜肉と霊＞の対立とは :人間の構成部分としての＜体と霊＞の対立ではない）

　　その時代に根本的対立を打ち出す天才は、この論争的対立を通して、固定化され命を失った人間のヴィジョンにダイナミズムを導入する。**ペギーにとっては、それは＜神秘＞と＜政治＞の対立である。**
　　\*この根本的、論争的対立（パスカルが＜無限大に無限の距離＞と呼んだもの）は、構成部分としての＜身体＞＜知性＞＜愛＞の各レベルの間にあるのではなく、「それぞれの層のなかに」共通してあるもの。（引用20）
　**図２　パスカルにおける根本対立　参照**　　**パスカルの場合**は、＜邪欲（la concupiscence）＞vs ＜恩寵（la grâce）＞の対立（聖パウロの＜肉＞と ＜霊＞に対応する）が各層にあるが、前者が＜存在の分裂＞と＜罪＞を意味するのに対して、後者は高次の次元に秩序づけられ、＜存在の一致＞と ＜超自然の交わり＞を意味する。
　**ペギーにおける根本対立　＜政治＞(la politique)　vs　＜神秘（la mystique）＞**　**ペギーの場合**は、＜政治＞(la politique)　vs　＜神秘（la mystique＞の対立が、すべての層、グループにあり、前者が＜存在の分裂＞＜いのちの根から断ち切られる＞ことを意味するのに対して、後者は、＜内的生命の源泉＞とつながることにより＜存在の一致＞と＜深みでの交わり＞を意味する。
　　**「すべては、神秘に始まり、政治で終わる。」**（引用21）すべては、ひとつの源泉から湧出する神秘（la mystique）で始まり、ばらばらに別れ落ちた政治（de la politique）で終わる。垂直方向のダイナミズムである＜神秘＞には有機的持続、繋がりがあり、直感があり、現在の自由のうちに開かれ、生成しつづける内的生命の源泉がある。水平方向に論理的に切り分ける知的まなざしが専制支配する＜政治＞は、概念が固定され、内的生命に閉じられ根を失った残骸となり果てる。
　\*ペギーは、神から来る愛といのちである＜恩寵＞をベルクソンの＜内的生命の源泉＞とかさねて理解している。

　　各層各グループの内部にある＜神秘＞vs＜政治＞の根本的対立を明らかにすることで、＜身体＞、＜歴史＞と内的生命としての＜霊＞、＜恩寵＞との連繋と一致を強調。そして聖パウロからアウグスチヌス、パスカルと続いてきた＜霊なるもの＞(spirituel)と対立する＜肉なるもの＞(charnel)という言葉の意味を１８０度転換させた。
　キリストの＜肉なる＞＜受肉せる＞魂«l’âme charnelle du Christ »、ロゴスが＜肉＞となった受肉の神秘

　　 « Car le surnaturel est lui-même charnel ».　(超自然は　それ自体肉なるものであるのだから)
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（引用２２）

　戦闘的社会主義者であったペギーは、カトリックに＜回心した＞(converti)のか？
 ＜唯一の回心＞は、社会主義者としての回心で、最後まで＜ひとつのまっすぐの道＞を歩んで来たのだと宣言。
ドレフュス事件を通して＜連帯＞として現実の行動で生きたものは、キリスト者にとっての愛徳(la charité)に他ならなかった。論争家として、一貫して反対し批判し続けて来たのは、知識人の内部にも、キリスト教徒の内部にも共に存在していた、＜身体＞＜歴史＞＜時間＞＜肉なるもの＞を軽視し、恣意的な知的一致を優位にして、いのちの根を切り取る＜近代的知性の専制支配＞、すなわちすべてを＜政治＞におとしめる知識人の傲慢であった。
　　引用　23

1. **神秘体験と＜内的生命の源泉＞としての＜恩寵＞　晩年作品におけるベルクソン**

1907年　ベルクソンの『創造的進化』に対するひとことの批判。カトリック信仰へ進む思想的な準備ができた時期。＜一元的進化論＞＜科学的進歩主義＞の批判。引用24

ベルクソンが＜内的生命の源泉＞をペギーに示したとするならば、パスカルは「３つの秩序」によって、＜身体＞と＜知性＞の異なった次元の上に、＜無限大に無限の距離で隔てられた＞より広く深く根源的な、第三の超自然の（霊的な／恩寵に生かされる）次元を導入した。そこには、キリストの地上的（身体的、知的）小ささ、貧しさと愛における偉大さという、二律背反の神秘的ヴィジョンがある。ペギーはこのキリストの神秘のうちに、＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞の＜神秘的な連携＞を見いだした。

**＜人となった神＞であるキリストとの出会いと交わり（コミュニオン）** : 身体のまなざしからも知性のまなざしからも隠された、人間の＜悲惨の中の偉大＞の発見であり、キリストにおける＜受肉＞（Incarnation）、歴史と永遠、罪と恩寵、＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞をひとつにする中心点の発見。この神的生命の湧き出る 実在の中心点は、抽象的な真理でも単に内在する＜生命の躍動＞でもなく、内在と超越が出会い、永遠と時間が出会う、キリストの受肉と贖罪という＜歴史的＞であり同時に＜超自然的＞である＜事実＞。
　パスカルの神、「アブラハムの神、イサクとヤコブの神、哲学者の神にあらず。。。。」（メモリアル）

科学的真理の＜一元的＞＜進歩主義＞に背を向け、ペギーは、人となったキリストの受肉のうちに示された、人間の＜悲惨の中の偉大＞と＜希望の神秘＞の中に現実の中心点を見いだしていく。

**1) ペギーの２つの 神秘体験**

１９０８年頃から、カトリック信仰を表明。しかし、絶望と死の誘惑をともなう苦しみは減らなかった。
　　キリスト教 : 証明(preuve)はなく、試練（épreuve）。。。引用25
１９０８年から１９０９年にかけて（１）、そして１９１１年に再び（２）、２回の絶望的試練と恵みの体験。
　　−　（１）受肉したキリストと恩寵の交わりの経験　１９０８年から１９０９年
　　　　　　親友の死、挫折、そして病気、自らの弱さと悲惨の体験の最中に、ペギーはふたたびパスカルの「病気の善用をもとめる祈り」を読み、そこから導かれて、マタイ福音書のキリストの受難の物語を読む。キリストの＜受肉せる魂＞(l’âme charnelle)との個人的実存的出会い、それが同時に、「矛盾の神秘」によって、三位一体のうちにすべての人と交わる＜諸聖人の交わり＞(la communion des saints)に入れられた経験。
　　　＜悲惨のなかの偉大＞　超越と内在の恩寵体験でもあり、時間と永遠、身体と魂をむすぶ中心点の発見。
　　　　　引用文　26−28
　−　（２）おとめマリアのヴィジョンと完き委託 (abandon) １９１１年前後
　　　　　　再び挫折と病気の苦しみの中に陥る。８歳の息子ピエールがチフスにかかり命の危機にみまわれたことをきっかけに、シャルトルの巡礼を誓い、その後巡礼の歩みの中で＜完き委託＞の経験をする。
　　　　　この時期の散文詩には、子供たちを聖母マリアに奉献した時に垣間見た、「肉なるものでありながら清い」「小さきものでもあるからこそ偉大な」「若い母」おとめマリアのヴィジョンから、世界のすみずみまで浸みわたる創造主の輝き、父なる神の親心、子供の信頼と委託、恩寵の働く＜夜＞のヴィジョンなど、淡々とした日常生活のなかでの神秘体験が描かれている。
　　　　引用文 29-35

**2)「夜」のイマージュ**

　　　　引用文 35-39

　　優れて＜実在＞を表象するイマージュ。

　　見えるものと見えないものを結ぶliminalなビジョン、二律背反をむすぶ神秘、

　　見えるイマージュから見えない実在への動き、＜過ぎ超し＞の動き、
　　ペギーの思想的、宗教的、文学的　探索のすべての結実

　　恩寵と癒しの場　存在の一致と深みでの交わり　NDE ヒーリングを含めた宗教間対話に開かれた次元

**3) 受肉の詩学　La poétique de l’Incarnation**

　　−　ペギーの文体は、脱線、断絶、矛盾、繰り返しが多くて難解。直線的論理的理解を拒み、読者を垂直的スパイラルの動きの中に入れる。多種多様なイメージの重なりを通して、収束によって常に指し示されている深みの実在＜中心点＞が見えてくる、深みの垂直の秩序。

　　　引用文 40

**ペギーの詩学 :** 現実に生きられた深みの次元に、直感によって＜中心点＞に下り、その源泉から「同じ豊かさで」＜概念＞と＜イマージュ＞が湧き出る。＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞の二重軸。

* 単純な直感の行為によって、実在の中心点に身を置き、そこから思想と文学が表裏一体となったさまざまなイマージュを生れ出る。
* つねにすべてを統合する一点を示し続けるパスカルの＜心の秩序＞であり、
ベルクソン哲学の＜知的努力＞を詩作において実践しているといえる。
　（１９１１年４月のベルクソンの講演「哲学的直感」引用）

**4) 希望の神秘　—聖霊の神学へ**

＜創造＞と＜持続＞、＜生成しつつある創造＞

　　　　ベルクソン ＜純粋記憶＞と記憶の中にある＜習慣による繰り返し＞を区別。＜純粋記憶＞と「新しく、「予見不可能な」＜現在＞が持続を構成している。「現在の瞬間の硬直化」こそが近代知性の枯渇の原因であり、「キリスト教の恩寵のいのちの働き」に最も反対するもの。引用
　　知的な安寧さのために、自由で豊かなはずの現在を、過去に固定されたものと取り違えている。キリスト教的な態度は、その逆で、永遠の今のうちに、貧しくあり恩寵への開きに委ねる。

希望　霊的な貧しさと恩寵の湧出

　　　謙虚さ（道徳的な貧しさ）と希望（記憶の貧しさ）が恩寵への開きをつくる。

　　　引用　「恵みに＜濡れる＞ことのない道徳者」自らを罪人と認める人には恩寵への開きがある。

　　「若い子供である希望」は記憶の服を脱いで恩寵を受け取る命の泉。

十字架の聖ヨハネ　霊的貧しさと希望　希望は記憶に枝づけされている。「所有」と反するもの。霊的死とは？

＜若い聖性＞　ジャンヌ・ダルク、＜記憶ゼロ＞　能動的な修行ではなく、恩寵による受動的な変容を生きる。

霊的な小ささ、貧しさは恩寵の受容能力を大きくするものである。恩寵は、身体、歴史、時間の軽蔑の上に成り立つのではなく、現実の人間性の尊厳と、存在と行為の一致によって実現する真の受肉のうちに開花する。

修行は、身体や世の中の歴史参加自体を否定するのではなく、身体や知性、特に記憶の中にある機械的繰り返しをともなう習慣を脱ぎ捨てて、今、ここでの、恩寵のいのちの自由な開花をめざすもの

恩寵の湧出　引用　（ベルクソン哲学）

1. **ベルクソンからペギー、ペギーからベルクソン**

　**「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神にして、哲学者の神にあらず」
　　超自然的事実、**

 **超越と内在、永遠と歴史、二元論の超越、いのちの一致とダイナミズム**

**十字架と三位一体、**

**晩年のベルクソン　キリストに帰依しながら、同胞と共に留まる事**

**「弟子であること」「息子であること」**